

『人間と宇宙の思考』

ルドルフ・シュタイナー

第一講演 1914年1月20日、ベルリン

これから私たちの全体集会の経過の中で4回の講演を行うわけですが、そこで私はある特定の観点から人間と宇宙の関連についてお話ししたいと思っています。そして、この観点を、私は次のような言葉で暗示したいと思います。

人間は自分の中に「思考」と呼びうるものを体験します。そしてこの思考の中に、何か直接的に活動しているもの、自分自身の活動として見通せるものがあると感じます。何らかの外なる事物、たとえば薔薇とか石とかを考察し、表象するときには、次のような言い方が正当です。石や薔薇を表象するとき、その事物、その植物のどれだけが捉えられているかは実のところわからない。薔薇を見れば、その表面の赤い色、形態、個々の花卉に分かれている様子を見ることはできる。石を見れば、どんな色をしていて、どんなに多様な角を持っているかを見ることができる。しかし、つねに自分に対してこのように言わなければならない。この事物の中には、外には現れ出ていない何かはまだ潜んでいるかもしれない。自分が石の表象、薔薇の表象によって、どれだけのことを捉えているかは実のところわからない、と。

しかし、誰かが何らかの思考を持つとき、その思考をつくっているのはその人自身です。いわば、その思考の一つひとつの筋の中に、その人自身が内在しているのです。その人は思考全体に対して、その活動の参加者になっているのです。その人はこのように言うことができます。この思考の中にあるものは、私が考えることによって思考の中にもたらしたものだ。私が考えていないことは、この思考の中には存在し得ない。私はこの思考を見通すことができる。薔薇や石の場合とは違って、私が何らかの思考を表象したときは、誰かがそれに対して、そこにはもっと別のものが内在していると主張することはできない。なぜなら、私がこの思考を生み出したからだ。私はこの思考の中に現存している。すなわち、私は、この思考の中に何があるかを知っている、と。

本当に、思考とは、私たちにとって根本的に固有のものです。もし思考と宇宙との関係を見出すことができれば、そのとき私たちは、自分自身の根本的に固有のものと宇宙との関係を見出すことになるのです。人間と宇宙の関係を思考という観点から考察することで、私たちに本当に実りのある観点がもたらされることは約束されているのです。そこで、私たちはそのような考察を行いたいと思います。それは私たちをアントロポゾフィー的考察の大いなる高みへ導いてくれることでしょう。しかし今日は基礎（下部構造）をつくる必要があります。皆さんの中にはそれを幾分抽象的だと感じる方もいるでしょう。しかしこれからの数日の間に、私たちにはこの基礎が必要であり、その基礎がなければ、私たちがこれからの四つの講演を通して目指している高次の目標には、一種の表面性をもってしか近づくことができない、ということをお分かりいただけるだろうと思います。今申し上げたように、人間は、もし自分が思考の中に持っているものを支えにするなら、自分の本質と宇宙との親密な関係を見出すことができる、ということが約束されているのです。

さて、私たちがこの観点に向かおうとするとき、この事柄には一つの大きな困難が存在します。私たちの考察にとってではなく、客観的な事実にとってある大きな困難が存在するのです。そ

の困難とは、人間は自分の思考のすべての筋の中に生きており、それゆえその思考を持つ人はあらゆる表象に対して、自分の思考を最も親密に知っているというのは真実だけれども、しかし、一そう、しかしなのです、大多数の人々は一切の思考を持っていない、ということです。そしてこのことは、すなわち大多数の人間は一切の思考を持っていないということは、通常は徹底して考えられてはいないのです。それが徹底して考えられていない理由は、まさにそのためには思考が必要だからです。差し当たり、一つのことに注意を向けなければなりません。それは私たちの広範な生活領域において、人々が思考を持つことを妨げているのは、通常的生活習慣の中では人々は本当に思考にまで到達するための欲求を持っていないということ、人々は思考の代わりに言葉で満足している、ということです。通常的生活の中で、思考と呼ばれているものの大半は言葉の中で経過します。人は言葉の中で思考しているのです。通常思われている以上に人は言葉によって思考します。そして多くの人々は何らかの事柄の説明を求めるとき、自分たちにとって馴染みのある音を含んだ言葉、何らかの記憶を想起させる音を含んだ言葉を与えられれば満足します。そして自分がその言葉の中に感じとったことが説明であり、自分は思考を持っていると信じるのです。

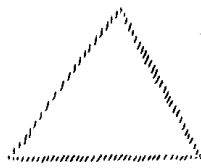
今、申し上げたことは、人間の精神生活の進化のある時点で、今日思想家を自称する人々が共有している見方をもたらすにいたりました。私の『19世紀の世界観と生命観』の新版では、この本を根本的に再構成し、西洋思想の発展史を前に持ってきました。それは紀元前6世紀から始まり19世紀まで至ります。そして最後に今日に至るまでの思想的・精神生活の記述を付け加えました。初めからあった内容も何度も書き直しました。というのも、いかに思考というものが実際にはある特定の時代の中でようやく発生したかを示したいと思ったからです。思考は本当に紀元前6世紀もしくは8世紀頃に、ようやく発生するのです。それ以前は、人間の魂たちは、言葉の正しい意味において思考と呼びうるものはまったく体験していませんでした。人間の魂たちはそれ以前は何を体験していたのでしょうか？ 彼らはそれ以前は形象（イメージ）を体験していたのです。そして外界におけるすべての体験は形象の中で起こりました。私はいくつかの特定の観点から、そのことを何度もお話ししてきました。この形象体験は古い霊視体験の最後の位相（フェーズ）です。その後、人間の魂にとって形象は思考へと移行するのです。

私がこの本の中で目指したのは、この精神科学の成果を一度、哲学の発展史を純粹に辿ることによって示すことでした。哲学という学問の土壌の上に完全にとどまりつつ、思考がかつて古代ギリシャに生まれたこと、人間の魂の体験にとって、外界を象徴的に（意味のある形象として＝*sinnbildlich*）体験する中から思考が発生したことを示したのです。それから私は、いかにこの思考がソクラテス、プラトン、アリストテレスにおいて先に進んだか、いかに特定の形態を持つに至ったか、いかにさらに進化してその後、中世において今から申し上げるところへ到ったかを示そうと試みました。

思考の進化は次のような疑いへと到ったのです。そもそも世界には、普遍思考、普遍概念と呼べるようなものが存在しうるのかという疑い、いわゆる唯名論に到ったのです。唯名論とは、普遍概念はただの名前でしかない、単なる言葉だという哲学的な見方のことです。普遍思考に対して、普遍思考とは単なる言葉でしかないという哲学的な見方が存在し、今日でも多くの人がそのような見方をしています。

一度、今お話ししたことを明らかにするために、簡単に見通すことができ、普遍的でもある概念を取り上げてみましょう。「三角」という概念を普遍概念として取り上げてみましょう。唯名論の立場に立つ人、11世紀、13世紀に形成された唯名論から離れられない人は、大体次のよう

に言うのです。三角を描いてみてくれ！ — いいでしょう、私は彼のために参画を描くことにします。例えば、このような三角です。



よろしい、と彼は言います。これは特別の、三つの鋭角からなる特殊な三角形だね。そういう三角形もあるね、と。でも、私はあなたのために別の三角形を描いてみよう、と言って、彼は直角を持つ三角形と、いわゆる鈍角を持つ三角形を描くのです。



そのようにして、第一に鋭角三角形があり、第二に直角三角形があり、第三に鈍角三角形があります。ここでその人は言うでしょう。君の言うことはわかる。鋭角三角形、直角三角形、鈍角三角形というものがあるのは確かだ。でも、そのすべてが三角形そのものではないね。つまり、普遍的三角形とは、三角形が含み得るすべてを含むものでなければならないのだ。三角形という普遍概念には第一、第二、第三の三角形が包括されなければならない。しかし、鋭角三角形が同時に直角三角形であったり、鈍角三角形であったりすることはできない。鋭角三角形は特殊三角形であり、普遍三角形ではない。同様に、直角三角形や鈍角三角形も特殊なものだ。普遍三角形は存在し得ないのだ。つまり、普遍三角形というのは特殊三角形を包括する一つの言葉なのだ。つまり、三角形の普遍概念は存在しない。それは個別のものを包括する一つの言葉なのだ、と。

もちろん、これはさらに進みます。誰かがライオンという言葉を発したとしましょう。唯名論の立場に立つ人はこのように言います。ベルリンの動物園に一頭のライオンがいる。ハノーヴァーの動物園にもライオンがいる。ミュンヘンの動物園にもライオンがいる。個々のライオンは存在するが、ベルリン、ハノーヴァー、ミュンヘンのライオンと関わりのある普遍ライオンは存在しない。それは個々のライオンを包括する一つの言葉にすぎない。存在するのは個別の事物だけであり、個別の事物の外に存在するのは、個別の事物を包括する言葉だけである。そのように唯名論者は言うのです。

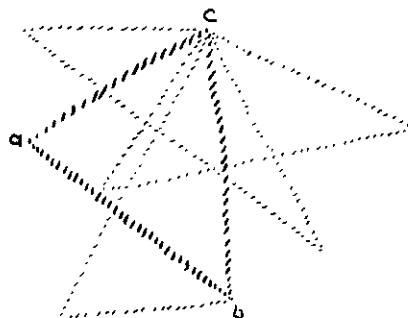
すでに述べたように、このような見方は今日でもまだ鋭敏な理論家の中に見られます。そして、今ここでお話ししたような事柄を少しでも考える人は、基本的には次のように告白しなければならないでしょう。確かに特殊なものというのは存在する。私は簡単には「普遍のライオン」や「普遍の三角形」が本当に存在するとは言いきれない。なぜならそれは本当には見えないからだ。誰かが本当にやってきて、こう言うでしょう。ごらん、親愛なる友よ、君が私にミュンヘン、ハノーヴァー、ベルリンのライオンを見せてくれるなら、それを承認することができる〔原文は「できない」だがそれでは意味が通じないので速記等の間違いと判断して訳文では「できる」とした〕。

もし君が「普遍的」なライオンが存在すると主張するなら、「普遍ライオン」が存在するところまで私を連れて行かなければならない。君が私にミュンヘン、ハノーヴァー、ベルリンのライオンを見せたとしても、それで「普遍ライオン」が存在していることを証明したことにはならない。もしそのような見方をする人が来たとして、その人に「普遍ライオン」を示さなければならぬとしたら、最初はやや困ったことになるだろう。この問いに答えることは簡単ではないからだ。「普遍ライオン」を見たいと言う人をどこに連れて行けばいいのだろう。

さて、私たちは今、精神科学が与えてくれるものに向かおうとは思いません。それはもう少し後で取り上げます。私たちはまず思考のもとにとどまりたいと思います。思考を通して到達できるところにとどまりたいと思うのです。その際、私たちはこのように言わなければなりません。もし私たちがこの基盤の上にとどまるのであれば、私たちは懐疑的な人を「普遍のライオン」のもとへ連れて行くことはできない、それは本当にできない、と。ここに困難の一つがあるのであり、それは単純に認めなければなりません。なぜなら、通常の思考の領域でこの困難を認めないとするれば、そもそも人間思考が抱える困難に向き合わないことになるからです。

三角形のもとにとどまることにしましょう。なぜなら、普遍的な事柄にとって、その事柄を三角形に即して、あるいはライオンに即して、またはその他の何かに即して明らかにするのは変わりがないからです。最初は、すべての性質、すべての三角形を含む普遍的な三角形を描くという見通しは立たないように見えます。そして、それが見通しが立たないように見えるだけではなく、通常の間人思考にとっては実際に見通しが立たないからこそ、すべての外面的な哲学はここで一つの境界壁の前に立っているのです。そして、そこでの課題は、外面的な哲学として自分は境界壁の前に立っていることを一度、本当に認めることです。しかし、この境界壁は外面的な哲学の境界壁でしかありません。この境界壁については、この境界壁を乗り越えていく可能性が存在するのです。そして、私たちは今一度、この可能性を見ておきたいと思います。

このように考えてみましょう。私たちはただ単に、三角形を描いたよ、これがそうだ、と言うように三角形を描かないようにするのです。なぜなら、そうすれば常に反論されるからです。それは鋭角三角形だね、普遍的な三角形ではないよ、と。つまり、三角形は別のしかたでも描くことができます。実のところは、そういうことはできないのですが、このできる、できないがどういう関係にあるかはすぐに見たいと思います。ここにある三角形をこのように描いて、その一つひとつの辺がそれが望むいかなる方向へも動く、ということを許容するのです。それも、さまざまな速度で動けるということを許容するのです（黒板に描きながら語る）。



この辺は、次の瞬間にはこの位置を占めるように動きます。この辺も、次の瞬間にはこの位置を占めます。この辺はもっとゆっくりと、この辺はもっと速くに動く、という具合です。今、その方向も転換します。

つまり、私たちはこの居心地の悪い表象へと赴き、このように言うのです。私はただ三角形を描いてそれを置いておくのではなく、君の表象に特定の要請を課す。君は三角形の辺が絶えず運動の中にあると考えなければならない。それらの辺が動いているのであれば、その運動の形態の中から直角三角形や鈍角三角形が、あるいはその他の三角形が同時に発生することができる。

この領域では二つの事柄を行い、また要求することができます。要求できることの一つは、素敵に安逸に行くことです。誰かが三角形を描き、それで完成で、それが見た通りのものであることがわかります。そこでは自分の思考の中に素敵に安らいでいることができます。自分の欲する通りのものがあるからです。しかし、それとは別のことを行うこともできます。この三角形をいわば出発点と見なし、そのすべての辺がさまざまな速度でさまざまな方向に回転することを許容するのです。この場合にはそこまで安逸ではなく、自分の思考の中で運動を行わなければなりません。しかし、そのぶん、そこには本当に普遍思考が得られるのです。一つの三角形で完結しようとすれば、普遍思考には到達しません。三角形という普遍思考は、その思考を絶えざる動きの中におき、変化の中に保つとき、存在するのです。

哲学者たちは、私が今お話しした「思考を運動の中へもたらす」ということをしなかったために、必然的に一つの境界壁の前に立ち、唯名論を成立させることになるのです。今、私たちは今お話ししたことを私たちが知っている言語、長いことお馴染みの言語に翻訳しようと思います。

私たちが特殊思考から普遍思考へ上昇しようとするれば、そこで私たちに要求されるのは特殊思考を運動の中へもたらすことです。すなわち、動きのある思考こそが普遍思考であり、そこでは一つの形態が別の形態の中へ入り込みます。私は「形態」と言いました。正しく考えるならば、全体は運動しているのであり、そこから運動を通して出現する個別のものはすべて、自己完結した形態なのです。先ほど、私は鋭角三角形、直角三角形、鈍角三角形という個別の形態だけを描きました。今、私が描くのは、一実のところは描くものではありません、これはすでに申し上げました、しかし表象することはできるのです。普遍思考は運動の中にあり、静止することによって個別形態を生み出すという表象を生みだすものです。一私は「形態を生みだす」と言います。

ここで見えてくるのは、唯名論の哲学者たちは必然的に境界壁の前に立ち、ある特定の領域、「形態霊」の領域の中を動いているということです。私たちの周囲には形態霊の領域が広がり、その中では形態が支配しています。そして形態が支配しているために、この領域には個別の、厳密に自己完結した個別の事物が存在するのです。そこから私たちが見ることができるのは、私が言及している哲学者たちは、形態霊の領域を出ていくという決意をまったくしなかったということです。そのために彼らは普遍思考の中に言葉以外のものを持ち得なかった、まさしく単なる言葉しか持ち得なかったのです。特殊事物の領域、すなわち形態領域から抜け出すことができれば、絶えざる運動の中にある表象に到ることでしょう。つまり、思考の中で「運動霊」の領域、一つ高位のヒエラルキアを現出させることになるでしょう。しかし、大多数の哲学者たちはそこに到らないのです。そして西洋思想の最後の時期にある人物が、まさにこの意味において思考するに到ったとき、その人はほとんど理解されませんでした。その人については多くが語られ、軽口も叩かれています。ゲーテが『植物の変容』の中で書いたこと、彼が「原植物」と名づけたものを見てく

ださい。それから彼が「原動物」と名づけたものを見てください。そうすれば、これらの「原植物」や「原動物」という概念を扱うには、柔軟に（動きをもって）思考しなければならないことがわかるでしょう。ゲーテ自身が語っている柔軟性（運動性）を受容するなら、単に完結した、形態によって制限された概念だけでなく、形態の中に生きているもの、動物界や植物界のすべての進化を貫いてうごめくものに到るのです。それはうごめくなかで変化し、三角形を鋭角にしたり鈍角にしたり、あるときは「オオカミ」に、あるときは「ライオン」に、あるときは甲虫になります。運動性に応じて、個別の中を移動するにつれて性質が変化していくのです。ゲーテは形態の硬直した概念を運動の中へもたらししました。それが彼の偉大なる、中心的な行為でした。それが彼の時代の自然考察に寄せた意味深いことだったのです。

ここには、私たちが精神科学と呼んでいるものが、たとえ哲学者でも今日必然的に固執せざるを得ないところから、人々が抜け出す手助けをするのに適しているという一例を見ることができます。なぜなら、精神科学を通して獲得される概念なしには、本当に誠実であるなら、普遍思考は単なる言葉であるということ以外のことを認めることは可能ではないからです。それが私が、大多数の人々は本来の思考を持っていない、と申し上げた理由です。そして彼らに思考について語れば、それは拒絶されるのです。

人々に思考について語るのはどういうときでしょうか？ たとえば、動物や植物には「集合魂」があると言うようなときです。普遍思考と言うにせよ、集合魂と言うにせよ—これからの講演の中で両者の間にどのような関係があるかを見ていきますが—、そこでは思考は同じものを目指すことになります。しかし、集合魂とは、それを運動の中で、絶えざる外的な、そして内的な運動の中で思考しない限り捉えられないものです。そうしない限り集合魂には到らないのです。しかし、それを人々は拒絶します。だから集合魂を拒絶し、普遍思考を拒絶することになるのです。

しかし、目に見える世界を知るためには、思考は必要ありません。そこで必要なのは、形態領域で自分が見たものを記憶することだけです。そして、大多数の人々がそもそも知っていることはそれだけなのです。つまり、自分たちが形態領域で目にしたことだけです。そこでは普遍思考は大多数の人々にとって単なる言葉にとどまります。そして、もし高次のヒエラルキアにおける数多くの霊たちのなかに「言語霊」も存在しており、その言語霊が普遍概念のための普遍的な言葉を形成するの でなかったなら、人々が自分でそれを行うことはないでしょう。つまり、まさに言語の中から、人々は差し当たり自分たちの普遍思考を受け取っているのです。そして、彼らが行っていることは、言語の中に普遍思考を貯蔵することとそれほど変わらないのです。

しかし、ここから私たちが見てとるのは、本当の思考による思考には何か独自のものがあるはずだ、ということです。そこに何かまったく独特のものがあるはずだということは、思考の領域において明瞭性に到ることがいかに人々にとって困難なことなりうるかを見れば理解できるでしょう。そのようにして、外的な日常生活において、しばしば少し自慢しようとして、考えることは簡単だと主張されることがあります。しかし、考えることは簡単なことではありません。なぜなら、本当の思考には、つねに運動霊の領域の息吹との、極めて密接で、ある意味では無意識的な接触が必要だからです。もし思考がそんなに簡単なことであれば、思考の領域でこれほどの巨大な過ちがなされることもなく、これほど長いことありとあらゆる問題や誤謬に煩わされることもなかったことでしょう。そのようにして、この一世紀は私がすでに何度となく取り上げてきた考え方、カントが言い出した考え方に煩わされているのです。

カントは、いわゆる存在論的な神の証明をなきものにしようとしてしました。この存在論的な神の証明はやはり唯名論の時代に由来するもので、その当時は、このような言い方がされていました。普遍概念に対応するのは言葉だけであり、普遍的なものは存在しない。個々の思考が表象に対するのと同じようにして、個々の思考に何らかの普遍的なものが対応するというのではないのだ、ということです。私は、思考がどのようになされたかという一つの例として、この存在論的な神の証明を引き合いに出したいと思います。

存在論的な神の証明は大体、次のように言います。神を仮定するならば、その神はもっとも完全な本質でなければならない。もし神がもっとも完全な本質であるなら、その本質に「有」が、すなわち存在が欠落することはありえないはずだ。そうでなければ神よりももっと完全な本質が存在することになるからだ。すなわち、人間が考えるうるさまざまな性質を備え、そのほかにさらに「存在する」という性質をもった本質があることになる。したがって、もっとも完全な本質については、それが存在すると考えなければならない。すなわち、神というものをもっとも完全な本質と考えるのであれば、神は存在すると考えるほかはない。つまり、概念そのもののの中から、存在論的な神の証明に基づいて、神は必然的に存在すると導き出すことができるのです。

カントはこの証明を論駁しようとしてしました。そして、そもそも概念の中から何らかの事物の存在を証明することはできないことを示そうとしたのです。彼はこれについて有名な言葉を記しました。私がやはりしばしば引き合いに出す言葉です。つまり、現実的100ターレルは可能的100ターレル以上でも以下でもない、ということです。つまり、1ターレルが300プフェニヒを含むとすれば、現実の100ターレルにはそれぞれ300プフェニヒが算入されなければならない。また同様に可能的100ターレルにもそれぞれ300プフェニヒが算入されなければならない。したがって可能的ターレルも現実的ターレルもそれが含む量は一緒である。つまり、私が現実的100ターレルを考えても可能的100ターレルを考えても、そこに違いはない。だから「もっとも完全な本質」という単なる思考から「存在」を抜き出すべきではない。なぜなら、「可能的な神」という単なる思考も、「現実的な神」という思考と同じ性質を持っているからだ、ということです。

これはとても理性的にみえます。そして1世紀にわたって人々は、可能的100ターレルと現実的100ターレルについてあれこれと悩まされてきたのです。しかし、より切実な観点、すなわち実際の生活という観点から考えてみましょう。この観点から、現実的100ターレルは可能的100ターレルよりも多くを含んでいると言えるのでしょうか？ 現実の100ターレルはまさに可能的100ターレルより100ターレル多く含んでいると言えるでしょう。まったく明らかなことです。一方に思考された可能的100ターレルがあり、他方に現実の100ターレルがあります。これは一つの違いです。一方の側にはまさに100ターレル以上があるのです。そして、まさに人生における大多数のケースでは、現実の100ターレルが重要であるようにみえます。

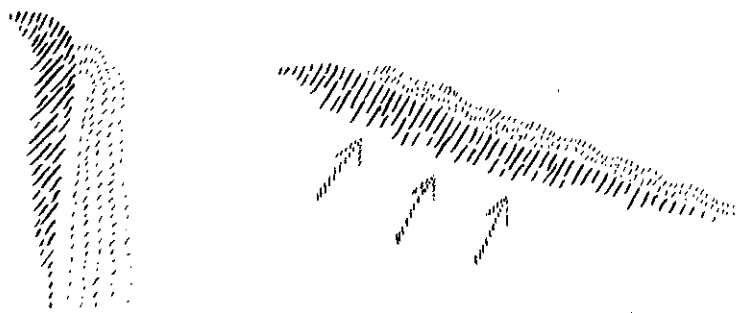
しかし、この事柄にはより深い側面があります。つまり、このように問うことができるのです。可能的100ターレルと現実的100ターレルの違いにおいて重要なことは何なのか、と。これは誰でも認めてくれると思います。100ターレルを持つことができる人にとっては、可能的100ターレルと現実的100ターレルの間には、疑いもなく大きな違いが存在します。というのも、考えてみてください。皆さんが100ターレルを必要としているとして、誰かが皆さんに可能的100ターレルか、現実的100ターレルとどちらが良いか、選択を迫るとしましょう。それが手に入るのであれば、その違いは重要に思われます。しかし、皆さんには現実には100ターレルは手に入らない、と仮定して

みましょう。その場合には皆さんにとって、誰かが皆さんに可能的100ターレル、もしくは現実的100ターレルのどちらかをあげません、と言われたとしても、それは極めてどうでも良いことでしょう。もしそれを手に入れることができなければ、実際に現実的100ターレルと可能的100ターレルはまったく同量であると言えるのです。

このことには一つの意味があります。すなわち、その意味とは、カントが神について述べたような、そのような仕方では神について語ることは、人間的な魂の経験を通して神を持つことがもはやできなくなった時代にのみ、なされうることだったということです。神が一つの現実として到達できなくなったとき、可能的神の概念も、現実的神の概念も、まさに同一のものになったのです。それは現実的100ターレルを持つか、可能的100ターレルを持つかが同一のことであるのと同様です。もし魂にとって現実の神に到る道がまったくないのであれば、カントの様式の中に保たれた思考の発達でもそこへ導くことはきつとないことでしょう。

このことから、この事柄にはより深い面があることがお分かりいただけると思います。私がこのことを引き合いに出すのは、思考に対する問いが現れるときは、より深く掘り下げる必要があるということを明らかにしたかったからです。思考の間違ひは、もっとも賢明な精神の持ち主の中にも忍びこみます。そして、たとえばカントの可能的および現実的100ターレルをめぐる考え方のような思考の脆さがどこにあるのか、長いこと洞察されずにいることがあるのです。思考においてつねに重要なのは、その思考がつかみとられた状況に注意を向けることです。

私は、まずは普遍思考の本性に即して、次にとりわけカントのような思想的間違ひの存在に即して、さまざまな思考過程を考察するためには、やはり事柄への深い関わりが必要であることをお示ししようと思いました。私はさらに第3の側面からこの事柄にアプローチしたいと思います。一度このように仮定しましょう。ここに山もしくは丘があり（図参照）、ここに険しい斜面があります（左図参照）。この険しい斜面に一つの水源が生まれるとします。この水源の水はまさに滝のように斜面を下っていきます。さてもう一方の側にも、それとまったく同じ状況で、一つの水源があります。その水源にも最初の水源とまったく同じ意志があるのですが、それを行うことはありません。つまり、この水源は滝として落下することはできず、小川の形態をとってきわめて優美に流れるのです。この第二の水源は、第一の水源とは別の力を持っているのでしょうか？



明らかにそうではありません。第二の水源も、もし山がそれを妨げ、山の力をその上に働かせなければ、第一の水源と同じ振る舞いをしたはずなのです。山がそこに働かせる力、保存力がなかったなら、第二の水源も第一の水源と同じように落下したことでしょう。したがって、二つの力を考える必要があります。山の保存力と、地球の重力です。第一の水源は地球の重力によって落下し

ています。しかし、この重力は第二の水源でも同じように存在しています。そこにも重力は存在する、重力が水源の水を下方へ引っ張っていると言えるのです。ここで誰か懐疑的な人物が、第二の水源についてそれを否定して次のように言うかもしれません。差し当たり、第一の水源では個々の水の飛沫が下方へ引っ張られているのが見えるが、第二の水源には何も見えない、と。つまり、第二の水源ではすべての点に重力に対抗して働く力、山の保存力を付け加える必要があります。

ここで、誰かがやってきてこのように言うとしましょう。君がそこで重力について語っていることは、どうも信じられない。保存力なるものについて言っていることも信じられない。水源の水がこの道をたどる原因はそこにある山だと言うのか？ そんなことは信じられない、と。そこでその人に、それでは君は何を信じているのか、と尋ねることができるでしょう。すると彼はこのように答えるでしょう。「私が思うに、水の底には水の一部分があり、その上にも水の一部分があり、そのすぐ上にも水の一部分がある。私が思うに、下にある水は、その上の水によって下方へ押し出されている。そしてその水もさらにその上の水によって下方へ押し出される。つねに一つ上の水の部分が一つ下の水の部分を押し出しているのだ。」ここには大きな違いがあります。最初の人物は、重力が水の塊を下方に引きつけていると主張します。それに対して2番目の人物は、つねに水の一部分がその下にある水の一部分を押し出している、それによって上にある水が後へ続いて流れていくことになるのだ、と言います。

どうでしょうか。もしそのように水が交互に押し出していくといえ、取るに足らない考えだと思われるかもしれません。しかし、もしここで問題になっているのが小川や水の流れではなく、人類の歴史であったらどうでしょうか。そして、先に挙げた人物がこのようなことを言っていたとしたらどうでしょうか。君が言うことで私が信じるのは、今、私たちが20世紀を生きているということだけだ。そこでは特定の出来事が起こった。これらの出来事は19世紀の最後の3分の1に起こった出来事によって引き起こされた。それらの出来事は19世紀の真ん中の3分の1に起こった出来事によって引き起こされ、さらにそれらの出来事は19世紀の最初の3分の1に起こった出来事によって引き起こされたのだ、と。これをプラグマティズムの歴史観といいます。そこでは原因と結果という意味で、先行する出来事によってそれに続く出来事を説明するのです。重力を否定して、水の部分に関してはつねに別の部分が付け加わわっていると言えるように、プラグマティズムの歴史観を採用するなら、19世紀の状態をフランス革命の結果として説明することになります。もちろん、私たちはこのように言います。「そこで押し出している力の他にも別の力が存在している。そもそもそこでの押し出す力は本来の意味では存在してはいないのだ。なぜなら、山の流れにおいてそうした力が押し出すことがないように、人類の歴史の中でも先行する出来事がその後の出来事を押し出すことはないからだ。そうではなく、つねに新しい作用が霊界からやってくる。それは水源の中につねに重力が作用するのと同じことだ。そして川の流れにおいて重力が山の保存力と交差するように、霊界の作用も別の力と交差する。もし一つの力だけが存在するとすれば、歴史はまったく別の経過をたどることだろう。君は個々の力を見てはいない。君は物理的な宇宙進化とは何かを見ていない。土星紀、太陽紀、月紀、地球紀の結果として記述されたものを見ていない。つねに人間たちの魂とともに起こっていることも見ていない。人間の魂は霊界を通過しては再び地上にやってくる。そして霊界の中からはつねに何かがこの進化の中に入ってきている。それを君はただ否定している。」そのように言うことでしょう。

しかし、私たちのもとには、いま特徴づけたようなものの見方を伴う歴史観が存在し、それは特に稀なものではありません。とくに19世紀には、それはきわめて独創的な考え方と見なされてい

たのです。それでは、いま獲得した観点からはそれについて何を言うことができるでしょうか？山の流れについても歴史についてと同じことを主張するとすれば、絶対的なナンセンスを主張していることになるでしょう。しかし、歴史について同じナンセンスが主張されることの中には、何があるのでしょうか？歴史はきわめて複雑であるため、プラグマティズムの歴史観がいたるところで表明されていることに気づかないのです。ただ気づいていないだけです。

そこから見えてくるのは、精神科学は生命の理解のために健全な原理を獲得するものですが、さまざまな生活領域においても何ごとかを成し遂げなければならない、ということです。まずは思考を学ぶこと、まずは思考の内的な法則や衝動を知ることが、実のところ、一種の必然性なのです。そうでなければありとあらゆるグロテスクなことが起こるでしょう。たとえば、今日では思考と言語の問題についてバランスを崩し、つまり、足を引きずる様子が見られます。それは著名な言語批評家、フリッツ・マウトナーのことです。彼はいま、大きな哲学的な事典を執筆しました。マウトナーの分厚い『言語批判』はすでに第二版が出版されています。つまり、私たちの同時代人にとってよく知られた本になったのです。この本の中には多くの独創的なことが含まれていますが、恐ろしいことも含まれています。例えば、そこには奇妙な思考の間違いも見出されるのです。読んでいくと、ほぼ五行ごとにそうした思考の間違いにつまずくことになります。それは善意のマウトナー氏が論理学の有用性を疑っているということです。彼にとって、思考とは言語でしかなく、そうであれば論理を組み立てる意味はないのです。なぜなら、論理とは文法を組み立てることにほかならないからだ、といいます。しかし、その他にもこのように言っています。まさに論理学が存在し得ないように、論理学者たちは皆愚か者だった、と。いいでしょう。それから、彼は言います。通常の生活では推論から判断が、そして判断から表象が発生する。そのように人々は振る舞っている。もし人々が推論から判断を、判断から表象を発生させているのであれば、何のために論理学が必要なのだろうか、と。私たちは何のために論理学が必要なののでしょうか？これは誰かが、何のための植物学が必要なのか、と問うのと同じくらい独創的なことです。だって昨年も、2年前もつねに植物は成長していたではないか、と。しかし、このような論理が、論理学を否定する人の中に見出されるのです。彼が論理学を否定するのは理解できることです。この特別な本の中には、もっとずっと奇妙なことも見出されます。この本は思考と言語の関係について明瞭性ではなく、混乱に到っているのです。

私は、霊的考察の高みに導く事柄のために、基礎（下部構造）が必要だと申し上げました。今日お話ししたような基礎は、人によっては幾分抽象的に思われるかもしれませんが、私たちにはこの基礎が必要なのです。そして、私は、この事柄をできるだけ簡明にし、何が大事なのかが見るようにすべく試みたいと思います。特に私が価値をおきたいのは、こうした単純な考察を通じて、形態霊の領域と運動霊の領域との間の境界線がどこにあるのか、一つ概念を持ちうることです。しかし、そのような概念を持ち得るどうかは、そもそも普遍思考を認めることができるのか、あるいは個別の事物の表象や概念しか認められないのか、ということに掛かっています。

以上は、幾分抽象的であるため、私はさらに余計なことを追加しなかったのですが、これらを前提として、明日からの話をさらに構築していきたいと思います。

（試訳・入間カイ）